

Neo Nerd Autocolony – N2A No.5 “endroll”

裏切りと弁明 (p.2)

わたしの為した罪は、確かに君たちにとっては裏切りだった。許してほしい。それでも、もう後には戻れなかった。わたしという個体は、新たなる段階へと達しつつあった。

真実を知られた時、轢死を希うほどに非難されることは、よく理解している。

それでも、書くしかなかった。書かざるを得なかった。この罪、憎い身体、悍ましい欲望、抜け出せないとしても。

あなたはまだ、単なるひとりの人間でしかなかった。今でも、そうかもしれない。揺れ動く心の中に、あなたは確固として存在する。紆余曲折を辿ってはいるけれども、ある位置を占めている。そして、極めて高次の位置に。それは瞬きするような短い時間の中で塗り変わっていき、わたしの全てを変えた。

生の剰余分 (p.12)

2023 年、9 月。男は、わたしに服飾を語った。

校舎の 40 インチのディスプレイでバック・トゥ・ザ・フューチャーを観ながら、60 年代のアメリカのファッションについて語った。

ある時は、ビリー・アイリッシュの普段着について語り、またある時は、ランウェイをゆくセレブたちのスタイリストについて語った。

2024 年、3 月。またある男は、わたしに音楽を語った。エスニック、ポップ、ダンスミュージック、世界中の様々な音楽を実際に聴かせながら、その歴史的位置づけや意義について語っていた。

わたしはただ黙って、それらを横で興味深く聞いていた。

実際、そういう話はとても興味深かった。

なにも分からなかったからだ。

高校をわずか半年で中退し、親にも嫌われ家を出て、しかも病気がちだったわたしは、自活しながら一年間の受験勉強を経て、北海道の旭川という田舎を脱出し、茨城県県のつくば市にいた。

和らがし (p.22)

病院特有の匂いのなか、院長と患者の抑え気味な話し声、治療の音、私たちの最低限の事務的な会話。待合室からは時折子どもたちの声だけが聞こえてくる。指示を受けて、治療の終わった席から器具を下げて徹底した消毒、滅菌を行う。友人の発言を思い出す。

「人の好きな要素に病気みたいな名前がついてるって感じ」

私がいくつかの精神疾患を持っていることを知ったときどう思ったかという問いに対する返答のあとの一言である。私にのみ適応される言葉ではなく、彼の持つ普遍

的な感覚の言語化だった。

強迫性障害の急性期から 10 年、すっかり慢性期となり潔癖の消えきらずとも落ち着いた私にはそこそこ向いた歯科助手という仕事。

グローブと呼ばれるゴム手袋を常に身につけて、あらゆるものの衛生を取り戻し保って、治療のアシストをする。治療ごとに準備する器具や薬品は変わるし、滅菌の方法も変わる。とにかく道具、手段のパターンが多く、また呼び出しや受付、決められた時間での作業もある。私は私のドパミンやノルアドレナリンの太い不足した脳を必死に回す。

日記 230511 (p.29)

ベッドから出る。パソコンを立ち上げた。

何か、何かしないと。焦りながらデスクトップにあるアイコンを片っ端からダブルクリックしていく。DAW も違う、kindle も違う、nola も違う。ましてやゲームなんて論外だ。ベッドに戻るが、やはり焦りは止まらないので、とりあえず note を開いて書き始めてみる。

生まれてこのかた周りの全ての大人が言う通り、俺には才能があるのだろうと思うし、当然の帰結として何者かになって恩返しをしなければならないという観念が頭にあり、生活の 8 割ほどで行為を強迫されている。おそらく 15 年はそうだろうと思う。その何者かは時にはなんとなくの好みから作り出した将来の夢だったり、ニッチな分野での先駆者だったり、言語に堪能な人材だったりしてきたのだが、はっきり言って両親と俺がどちらも心から納得しているものはその中にはないと感じ始めた。

秋の日のヴィオロンのため息の身にしてみてもひたぶるにうら悲し (p.31)

発達障害と診断された私は救われた気持ちになった。これで自分は悪くないことが証明された。私はテスト勉強ができなくて、課題を出せなくて、遅刻の常習犯だった。これですべて ADHD のせいにできる。医学からのお墨付きを得た。高校 2 年生、好きでこんな生き方をしているのではなかった。自分もみんなみたいに宿題を出したい。テストでいい点を取りたい。しかし、家に帰ると疲れ果てている。スマホしかできない。ひたすらアリの巣の動画を見る。オモコロチャンネルを見る。真顔で。ひたすら焦りを感じながら。はやく宿題しないと、テスト勉強しないと。そう思っているのに、身体はひたすら動画を見る。時計が 1 時、2 時と過ぎていく。今思うと、一種の自傷行為だったのかもしれない。

hi ne mo su (p.34)

はじめまして。わたしは 2004 年の 8 月 4 日にここに産まれました。

でも、本当にその日がわたしの生まれた日なのでしょ

うか。わたしはそれを母親から聞かされたのみで、母親も助産師から教えられただけでしょう。その人だって時計から聞かされただけに過ぎません。

極論にはなりますが、わたしを説明するあらゆることは意味を持ちません。

文体を崩させてください。

この文章はわたしがわたしを語るものだ。しかしこれでわかるのはわたしの自意識が妙にねじくれているということだけだろう。わたしのことを知るにはぜひとも、皆さんにはわたしと対面して会話してもらうほかない。また、普段は短歌をしてばかりのためこうしてエッセイを書くことには慣れていない。読みにくかったとしてもご了承ください。

「輪郭」(p.39)

死んだように生きる日々の中でふと、自分の輪郭を実感する瞬間がある。伸びた無精髭を剃るとき、肥った腹にシャツが触れるとき、あるいは悴む手をポケットに押し込むとき、僕は自分が生きた人間であることをどうしようもなく自覚する。それは悪夢から醒めたあとの恐怖によく似たおぞましさを持っていて、次第に額や首元からは冷や汗が流れる。虫が這うようなその感覚はまた僕の輪郭を確かにし、僕に耐えがたい恐怖と孤独を感じさせるのだった。

現代人はみな幽霊のように生きていて、誰もが輪郭を失っているように見える。自他の境界を失い、これといった目的もないままに人々はただどこかに歩き続けている。東京などはその最たる例で、群衆は半透明なその身体を引き摺って街を練り歩く。それはまるで百鬼夜行のようで、見ているだけで恐ろしいのだが、不思議なことに一歩そこに足を踏み入れると、僕も魑魅魍魎の一員として街を歩き始めることになる。その瞬間、えも言われぬ安堵と共在感覚で心が満たされるのを感じる。僕等現代人は、互いに幽霊としての規範に従うことで、耐えがたい恐怖と孤独から逃れようとしているらしかった。

シェイクスピアは隠れカトリックだった？ —ピーター・ミルワード先生の思い出 (p.47)

筆者が上智大学の聴講生だった 2009 年頃、月曜の夜に S.J.ハウスで開講されていたピーター・ミルワード先生 (1925～2017) の聖書勉強会によく参加した。ミルワード先生はオックスフォード大学時代に『ナルニア国物語』の作者である C・S・ルイス (1898～1963) に師事しており、指導教官は「インクリングズ」のメンバーでもあった C・L・レン (1895～1969) であったが、『指輪物語』の作者である J・R・R・トールキン (1892～

1973) の講義を受けたこともあるという (大教室なのに小声でボソボソ話すのでいったい何を言っているのか分からなかったらしい)。ある時、ミルワード先生は珍しくメガネを掛けておらず、顔に傷があったので、少し心配したが、その理由は C・S・ルイスの教え子ということもあり、映画『ナルニア国物語』の試写会に招待され、エンドロールの途中で退出しようとして転倒し、メガネを壊してしまったのだそうである。ミルワード先生は「人が集まらないとつまらない」とか「犬はそこいるのに「いぬ」。たいへん神秘的な存在かと思われます」など、隙あらば冗談を言い出すので、油断ならないのだが、「私はロンドン空襲の夜に家族で灯りをつけずにお祈りをしている時、母が床に置いたメガネを踏んで壊してしまいました。どうやら私は暗がりだとメガネを壊してしまうようです」と微笑んでおられたのが強く印象に残っている。

擬似日記 (p.55)

人の顔を覚えるのが得意だ。

さつき飲み会の帰りに寄ったコンビニで、あまり顔を出していないサークルの先輩を見かけた。こういうときは下手に声をかけない方がいいに決まってる。

だが、酔っ払っているのに任せて「お久しぶりです」と肩を叩いた。相手の怪訝な顔。きっと私の顔はアルコールで真っ赤になっていることだろう。「読書会の・・・」と続けると、先輩は多少腑に落ちたような顔をする。関係が希薄なコミュニティだ、自分が忘れてい存在がいてもおかしくない、そう安堵したことだろう。ましてや私は幽霊部員なので覚えているはずがなかった。

パノプティコン (p.56)

(日本) はどうやら人を (●) してもいいらしい。

もっとも合法的にそのようなシステムがミシェル・フーコーの言うパノプティコンのように創造されているのだこと (監獄の誕生)。

簡単に言えば、大企業や大学があって、そのシステムを妄信する限り、この日本はずっと停滞し続け、差別は解消されないし、だらだらと資本主義と既得権益を妄信する他はないということである (©マーク・フィッシャー『資本主義的リアリズム』)。

冷笑的な女性の常識があるよやゆとり世代の若老害ほどこの傾向が高い。そろそろ私たちは現実を見ないといけな。

この国の歪みは東大医学部 YouTuber ベテランちこそが日本のインテリの一人であり、ミズサー木曜担当 B A R店主のキュアロラン・バルトこそがこの国のインテリの等身大であることである。